



竹

特別講座 京の庭師に学ぶ「和の庭」素材編

「和の庭」の凛とした空気や清々しい美しさは、竹が支えています



「和の庭」案内人
つだ ひでお
津田 秀夫
昭和29年生まれ。
東京農業大学農学部造園学科卒業。
(株)穂清・津田造園同社代表取締役。
平成16年、京都府優秀技能者
「現代の名工」受賞。
現在、(社)京都府造園建設業協会理事。
京都府造園協同組合副理事長。

※(株)穂清・津田造園は明治11年創業。京都府より「京の老舗」として表彰。津田さんが5代目となる。

「中川利春さんは、長年一緒に庭づくりをしてきたパートナーです。彼に竹垣のイメージをひとつと話す上、「ほな、ちやうしよし」と同様の呼吸で構想が進む。その経験とセンスには絶大な信頼を置いています」

前号から私・津田秀夫が案内人としてお送りしている「和の庭」づくり、今号からは庭を構成する素材についてお話しします。
まずは「竹」。私のよき仕事のパートナーでもあり、元禄時代から京都で造園用竹材を扱い、竹垣の設計施工を行ってきた中川利春さんに、庭を美しく引き立てる竹の魅力や、竹垣の種類と使い方を教えていただきましょう。



なかがわ としはる
中川 利春
昭和23年7月5日生まれ。
京都府立田辺工業高等学校卒業。
自動車関係の職業を経て、
竹又・中川竹材店に入店。
一級竹芸技能士
(割組竹芸品製作作業、
編組竹芸品製作作業、
丸竹加工竹芸品製作作業)を保有。

※竹又・中川竹材店は、元禄元年(1688年)、竹屋又四郎が「竹屋」を屋号として創業。その後三百年以上にわたる伝承された技術で、小物、雑貨から庭園の竹垣まで幅広くデザイン・製作・施工している。

「寸法もデザイン」だからこだわる

庭における「竹」は、土や砂利や苔やらと同じひとつの素材です。決して竹が偉そうにしてもらいたくありません。素材のひとつとして庭のなかでどう生かしていくか、ということが大切なのです。ただ、脇役ではありませんが、時々こう…「目立ったるか」という感じですかね(笑)。庭の景色を引き立てながら、竹の美しさも見せたいなと。

最近、竹垣も機能的で便利な既製品が出ています。ただ竹垣というのは、もともと寸法の決まったものではなく、庭の空間に合わせて一つひとつタテヨコを決めてつくっていくもの。庭の空間や雰囲気はそれぞれ違います。そのなかで竹垣がバランスよく納まる寸法は、現場でその庭に合わせて決めるしかない。それは京都の造園に関わる者として譲れない部分です。ですから、みなさんが既製の竹垣を使用する場合でも、空間との調和を見ながら高さを変えてみるなど、全体のバランスを重視していただきたいですね。



中川竹材店での作業風景。竹は使用する前にこうして洗い洗います。

なぜ寸法にそこまでこだわるかといえば、「寸法もデザイン」だからです。
庭のデザインは津田さん(本誌前号に登場)のような造園屋が行い、私は竹屋として彼の指示に沿って竹垣をつくります。たとえば津田さんに「建仁寺でいいか?」と言われたら、竹垣は建仁寺垣になります。そして寸法を決めるんですが、その庭のなかでどんな大きさだと調和するか、後ろの景色とのからみはどうか、縁側に座ったときにどう見えるか……と、いろいろな視点から考えるのです。竹を実際に手に持って「この高さでどうやる?」と何度も検証するなど、寸法決めは非常にシビアに行われます。寸法が狂うと空間のバランスが悪くなり、どんなデザインでどんな素材を使おうか台無しだからです。



黒文字の小枝を払い1本の枝にしているところ。これをまっすぐに伸ばして揃え、黒文字垣をつくります。



きれいなだけでなく、暴れさせる

竹垣のなかで「穂垣」といえば、萩、黒文字、竹の枝などの細い枝を1本1本集めて編み上げたもの。こういう垣は、きれいに揃えて整えるのが基本ですが、「この垣根のこのへんは、やんちゃして、暴れさしとこか」などと、池のさわか石積みのおなどを適度に「暴れさせる」こともあります。京の庭はまささらな燈籠ではなく、わざわざ苔のついたものを尊ぶ。それと似た感覚で、きっちりときれいにつくりすぎず、一部を暴れさす、そこ

に風情が生まれるのです。
こういった感覚にしても、また、よく「この高さに対して、どんな太さの竹をどんな間隔で配置すればいいんでしょうか」などと聞かれますが、割付や高さのバランスにしても、マニュアルなどありません。弟子入りして修行して身体で学んでも、最後は自分の感性の問題。それを磨くには、常に考えて、やってみて、経験するしかありません。

竹垣のいろいろ

和の庭でよく使われている竹垣のデザインは、以下のように、ほとんどが伝統的なものです。伝統デザインは、何百年という長い長い時を経て、よく考えられ完成されています。それに対抗できるような新しいものを創作するのは至難の業です。それに、ただ新しくすればいいというわけではない。大切なのは「洗練」で、新しくても洗練されていなければ意味がありません。



伝統デザイン

四ツ目垣
透かし垣の代表。小竹を縦横に組んだだけのシンプルデザインです。垣越しに透けて見える景色に奥行きがあるので、狭い露地などの手前で仕切れば、実際よりも奥行きと広がりを感じさせることができます。

建仁寺垣
割り竹の立子*1を竹の押縁*2で押さえた構造の竹垣。遊蔽垣(目隠しが目的の垣)として、もっとも普遍的、代表的な垣のひとつです。隣接を仕切るのに適しますが、あまり背を高くすると圧迫感が出るので注意。



光悦寺垣
竹のもつしなやかさが、職人の技で巧みに生かされた透かし垣。曲線の美しさと柔らかな見どころです。庭の一部を軽く仕切りたいときに使うと、空間に軽やかなリズム感が出ます。



御簾垣
細い竹を横に積み上げたシンプルな垣。意匠が御簾(＝すだれ)に似ているところから、この名があります。モダンなイメージがあるので、和の庭芝生の庭といった和洋折衷の庭の境界に使うと、どちらの庭にも調和します。

*1) 立子(たてこ) 垣を組むさいに、縦に使う材。
*2) 押縁(おしひぢ) 立子を押しさえ、水平方向に取り付ける材。